

# 天草版『平家物語』のオノマトペ

濱千代 いづみ

## 1. はじめに

近年オノマトペ研究は盛んに行われ、日本語学の立場からにとどまらず、さまざまな観点から解明が進められ、スポーツにおける指導や医療現場における診察などに活用されている。<sup>(注1)</sup> 本研究の目的は、天草版『平家物語』のオノマトペを語彙の計量的観点と文脈における用法の観点から追究し、日本語のオノマトペ語彙・用法史の一端を埋めることにある。そこで、まず天草版『平家物語』のオノマトペを高野本『平家物語』、天草版『エソポのハブラス』と比較しつつ語彙量の視点で研究する。次に、オノマトペの使用部分を平家物語諸本の該当部分と比較しつつ用法の視点で研究する。

取り上げる文献について簡単に説明する。

天草版『平家物語』は、『エソポのハブラス』及び『金句集』と合わせ綴じた形で、現在のところ大英図書館に一本が伝存されるのみである。天草版『平家物語』の扉・序の刊行年は1592年であるが、『エソポのハブラス』の扉の刊行年は1593年であり、総序も1593年となっている。天正遣欧少年使節がもたらした活版印刷機によって天草学林（コレジョ）で印刷され、ポルトガル語式の写音法によるローマ字で日本語が綴られている。

天草版『平家物語』は古典の平家物語を室町時代末期の話し言葉に書き直してあり、物語は喜一検校と右馬の允の二人が対話する形式で進行する。イエズス会の宣教師たちが日本の言葉と歴史とを学習するためのテキストとして編集された旨が、日本人修道士不干ハビアンの手になる序文に記されている。天草版『平家物語』の原拠として一方流の覚一本や百二十句本が用いられたことが判明している。<sup>(注3)</sup>

高野本『平家物語』は応安四年（1371）の沙門覚一の識語を有している。覚一本は語りの正本を志向したが、その中で高野本は古態を継承した後期の伝本である。表記は漢字仮名交じり、文体は和漢混交文である。

『エソポのハブラス』はイソップの生涯と数々の寓話とで構成され、それを室町時代末期の話し言葉に翻訳してある。イエズス会の宣教師たちが日本語の学習をするための

テキストとして、また布教の際に引用する拠り所として編集された旨が、序文に記されている。

第二段階で比較に用いる平家物語諸本は、高野本のほかに斯道文庫本・平松本・小城鍋島文庫本である。いずれも天草版『平家物語』の原拠を探究するときに参照する伝本である。

次にオノマトペの認定基準について説明する。

オノマトペの認定基準については濱千代いづみ（2013）と同様、『現代擬音語擬態語用法辞典』の「擬音語・擬態語とは何か」<sup>(注5)</sup>に示してある基準に従うところが多い。以下にその記述を利用する形で記す。

「擬音語・擬態語とは、外界の物音、人間や動物の声、物事の様子や心情を、直接感覚的に表現する言葉である。」擬音語は「活字化できる音声連続及び発音できる文字表記によって対象の音・声を表現したもの」、擬態語は「活字化できる音声連続及び発音できる文字によって対象の様子を表現したもので、」ともに「一定の形と意味をもち、一定のグループの人々の間で抽象的・普遍的に通用する。」このような基準に達するものをオノマトペと認定する。ただし、あまり一般的に見えないような形についても、文脈で意味を判断できるものは取り上げる。

天草版『平家物語』及び『エソポのハブラス』はローマ字表記であるが、オノマトペも引用も歴史的仮名遣いに直して示す。オノマトペを抽出し、見出し語を立てる方法は原則として次のとおりである。

- (1) 拗音・促音を小字としない。

例 「ひやうつつと」

- (2) 助詞「と」の続く場合は、「と」を付した形で示す。

例 「ちやうちやうど」、「ひたと」

- (3) 陳述の副詞としての用法は除く。

例 「ちつと」の場合、「ちつとと力づいて」は認定するが「ちつとも騒がず」は除く

- (4) 人の声のうち、動作に掛かるものは取り上げる。

例 「悦あへる」に掛かる「あつと」

天草版『エソポのハブラス』及び天草版『平家物語』は「扉・序・物語の本文・目録」の四部によって構成されている。このうちの物語の本文に使われている語彙を調査の対象とする。計量には次の文献を利用し、単語の認定の基準を一致させるようにする。

a 『エソポのハブラス本文と総索引』

b 『天草版平家物語語彙用例総索引』

c 『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（自立語編）

c は新日本古典文学大系『平家物語』の本文に基づいて作成されたものである。引用の際は、大系本の頁・行を示す。以下、天草版『平家物語』は〈ヘイケ〉、高野本『平家物語』は〈高野本〉、天草版『エソポのハブラス』は〈エソポ〉の呼称を用いる。

## 2. 異なり語数と延べ語数

〈ヘイケ〉〈高野本〉〈エソポ〉の自立語の異なり語数と延べ語数を計量し、〈ヘイケ〉を1とした場合の倍率を示すと、表1 になる。

表1 〈ヘイケ〉〈高野本〉〈エソポ〉の自立語の語彙<sup>(注6)</sup>

作品名	自立語 異なり語数	自立語 延べ語数	自立語 1 語当たり	異なり語数 倍率	延べ語数 倍率
〈ヘイケ〉	7241	46893	6.3	1.0	1.0
〈高野本〉	14790	99309	6.7	2.0	2.1
〈エソポ〉	2904	11749	4.0	0.4	0.3

自立語の延べ語数を作品の語彙量とみなし、その語彙量によって作品の規模を判断すると、〈高野本〉は〈ヘイケ〉の2.1倍、〈エソポ〉は0.3倍の規模である。自立語1 語当たりの使用度数を見ると、〈高野本〉の6.7は〈ヘイケ〉の6.3と近似し、〈エソポ〉の4.0は〈ヘイケ〉の3分の2程度である。

〈ヘイケ〉〈高野本〉〈エソポ〉のオノマトペの異なり語数と延べ語数を計量し、〈ヘイケ〉を1とした場合の倍率を示すと、表2 になる。

表2 〈ヘイケ〉〈高野本〉〈エソポ〉のオノマトペの語彙

作品名	オノマトペ 異なり語数	オノマトペ 延べ語数	オノマトペ 1 語当たり	異なり語数 倍率	延べ語数 倍率
〈ヘイケ〉	59	175	3.0	1.0	1.0
〈高野本〉	72	298	4.1	1.2	1.7
〈エソポ〉	17	19	1.1	0.3	0.1

〈ヘイケ〉を1とした場合のオノマトペの延べ語数と作品の規模との関係を見る。すると、〈高野本〉の1.7倍は作品の規模2.1倍に比較して倍率が低く、〈エソポ〉の0.1倍も

作品の規模0.3倍より低い。〈ヘイケ〉は〈高野本〉〈エソボ〉と比較してオノマトベの語量を多用しているといえよう。この点について、自立語に占めるオノマトベの語量の割合を算出して検証する。数値が小さくなるので、千分率（パーミル：‰）の数値で示す。

表3 自立語に占めるオノマトベ（単位：‰）

作品名	異なり語数	延べ語数
〈ヘイケ〉	0.08	0.04
〈高野本〉	0.05	0.03
〈エソボ〉	0.06	0.02

表3によると、異なり語数・延べ語数の双方で〈ヘイケ〉の割合がもっとも高く、〈ヘイケ〉が〈高野本〉〈エソボ〉と比較してオノマトベの語量を多用していることが確認できる。

オノマトベ1語当たりの使用度数を見ると、〈高野本〉の4.1は〈ヘイケ〉の3.0よりも多く約1.4倍、〈エソボ〉の1.1は少なく約0.4倍である。この結果にはオノマトベの異なり語数の多寡が影響している。

以上、異なり語数・延べ語数の観点でオノマトベの語量を分析した結果をあげる。

- ・ 〈ヘイケ〉は〈高野本〉〈エソボ〉と比較してオノマトベの語量を多用している。

### 3. 使用率

〈ヘイケ〉〈高野本〉のオノマトベについて、各語の使用率（使用度数÷延べ語数×1000、単位：‰）を計算する。〈ヘイケ〉の降順、〈高野本〉の降順に並べ、10パーミル以上の語を一覧にすると表4ようになる。〈エソボ〉と古活字本『伊曾保物語』の使用度数を参考にあげる。

〈ヘイケ〉では「ざつと」「どつと」「むずと」「つつと」「はらはらと」「きつと」「そつと」の7語が30パーミルを超える。〈高野本〉では「はらはらと」「つつと」「ざつと」「どつと」「むずと」「きつと」「さめざめと」「どうど」「つらつら」の9語が30パーミルを超える。〈ヘイケ〉〈高野本〉に共通するのは6語である。共通でないもののうち、〈ヘイケ〉であがった「そつと」は〈高野本〉の使用度数がゼロである。〈高野本〉であがった「さめざめと」「どうど」は〈ヘイケ〉にも存するが、双方の使用率の差がか

表4 〈ヘイケ〉〈高野本〉で10パーミル以上のオノマトペ

見出し語	漢字	〈へ〉 度数	〈へ〉 使用率	〈高〉 度数	〈高〉 使用率	〈エ〉 度数
ざつと		25	142.86	22	73.83	1
どつと		16	91.43	22	73.83	0
むずと		14	80.00	15	50.34	0
つつと		11	62.86	25	83.89	0
はらはらと		10	57.14	32	107.38	0
きつと	屹度	6	34.29	14	46.98	0
そつと		6	34.29	0	0	2
ちやうど		5	28.57	7	23.49	0
まちつと	今些	5	28.57	0	0	0
さめざめと		4	22.86	12	40.27	0
ががたり	峨々	4	22.86	6	20.13	0
まんまんたり	漫々	4	22.86	6	20.13	0
ほのぼのと		4	22.86	3	10.07	0
むさと		4	22.86	0	0	0
ちつと	些	3	17.14	8	26.85	0
ひしと	犇	3	17.14	8	26.85	0
ひたひたと		3	17.14	2	6.71	0
ひたと	直	3	17.14	0	0	1
どうど		2	11.43	10	33.56	0
ほとほとと		2	11.43	3	10.07	1
おめおめと		2	11.43	2	6.71	1
まつと		2	11.43	0	0	0
はたと		1	5.71	8	26.85	1
ひやうど		1	5.71	6	20.13	0
ばつと		1	5.71	5	16.78	0
ひしひしと	犇々	1	5.71	5	16.78	0
つくづくと		1	5.71	4	13.42	1
つらつら	倩	0	0	9	30.20	1
さつと		0	0	6	20.13	0
ひやうふつと		0	0	5	16.78	0

なり大きい。そして、「つらつら」は〈ヘイケ〉の使用度数がゼロである。〈ヘイケ〉では使用率の高位に、すばやい動作、急な変化、勢いのあるさま、力のこもるさまを表すオノマトベが多く並ぶ。〈高野本〉では泣くさまを表すオノマトベが2語有り、〈ヘイケ〉よりも使用率が高い。

ところで、〈ヘイケ〉〈高野本〉の間には同じオノマトベでも使用率に差が見られる。そこで、使用率の差によってオノマトベを整理してみる。

表5 〈ヘイケ〉〈高野本〉の使用率の差による分類

使用率の差	〈ヘイケ〉が高い語	〈高野本〉が高い語
20%以上	kざつと、aそつと、kむずと、 まちつと、むさと	さつと、kつつと、はたと、tど うど、つらつら、kはらはらと
15%以上20%未満	kどつと、ひたと	ひやうふつと、tさめざめと
10%以上15%未満	ほのぼのと、ひたひたと、まつ と	ばつと、ひしひしと、kきつと、 ひやうど
10%未満	〈高〉でゼロでない語：18語 〈高〉でゼロの語：16語	〈へ〉でゼロでない語：6語 〈へ〉でゼロの語：31語

\* 表の中で、kの語は〈ヘイケ〉〈高野本〉で使用率が30%以上のもの、aの語は〈ヘイケ〉で使用率が30%以上のもの、tの語は〈高野本〉で使用率が30%以上のものである。網掛けの語は、使用率の差が10%以上で〈高野本〉で使用度数がゼロのものである。

〈ヘイケ〉〈高野本〉の使用率が30パーミルを超える語のうち、k・a・tの印が付いている6語は使用率の差が20パーミル以上で、2語は15パーミル以上20パーミル未満に入る。〈ヘイケ〉〈高野本〉の間には、同じオノマトベでも使用率の高位の語に使用率の大きな差が見られる。

以上、使用率の観点でオノマトベの語彙を分析した結果をあげる。

- ・ 〈ヘイケ〉では使用率の高位に、すばやい動作、急な変化、勢いのあるさま、力のこもるさまを表すオノマトベが多く並ぶ。〈高野本〉よりも泣くさまを表すオノマトベの使用率が低い。
- ・ 〈ヘイケ〉〈高野本〉の間には、同じオノマトベでも使用率の高位の語に使用率の大きな差が見られる。

#### 4. 使用率の差が10パーミル未満の語

〈ヘイケ〉〈高野本〉の使用率の差が10パーミル未満で〈高野本〉か〈ヘイケ〉がゼロの語について、使用度数と語種で分類すると次のようである。括弧の中に意味や続く語、漢語の表記を示す。

表6 使用率の差が10パーミル未満で〈高野本〉か〈ヘイケ〉がゼロの語

[1] 〈高野本〉がゼロの語

〈ヘイケ〉の使用度数が1のもの 16語

和語 13語

うらなり（風）、ぐるりぐると（回る）、こつと（にわかである）、さらさらと（はしりわたる）、ざんぶと（海へ蹴入る）、しどろもどろなり（動きが乱れた）、とつと（程度がはなはだしい）、ぴつしと（すきまがない）、ひつたと（すきまがない）、ひつぷつと（射きる）、ひやうつつと（射通す）、ひよつと（参る）、ゆらりつと（肩を越える）

漢語 3語

いういうたり（悠々、落ち着いている）、ちやうちやうど（打打、弦）、れんれん（連々、絶えない）

[2] 〈ヘイケ〉がゼロの語

〈高野本〉の使用度数が1のもの 28語

和語 15語

あつと（悦びあへる）、かはと（飛び乗る）、からからと（笑ふ）、からりからりと（熊手を甲にうちかける）、からりと（投げる）、くと（胸板をつく）、くると（踏みかへす）、さらさらさらと（はしりわたる）、ちつと（笛の音）、づだづだなり（大蛇を切る）、つと（出て来）、づんど（踊りこゆ）、ひやうづばと（射る）、ひらひらと（靈剣が光る）、わなわなと（ふるふ）

漢語 13語

いんりんたり（瀟瀟、波紋を描く）、がうがうなり（噉々、口やかましい）、かくやくたり（赫奕、光り輝く）、くわうくわうたり（曠々、広々としている）、くわううたり（晃漾、水が深く広い）、けんけんたり（嶮々、けわしい）、さうさうたり（蒼々、あおあおとしている）、さくさくたり（索々、音が響く）、しんしんたり（深々、鬱蒼としている）、せいせいたり（凄々、寒い）、ちんちんたり（沈々、静まりかえる）、ばくばくたり（漠々、はてしない）、へいへいたり（平々、たいらで

ある)

〈高野本〉の使用度数が2のもの 3語

和語 2語

ひいふつと（射きる）、むんずと（とりつく、つかむ）

漢語 1語

みやうみやうたり（冥々、暗い）

表6にあがった語の使用度数は1か2というように少ない。和語の中には[1]にある〈ヘイケ〉の「さらさらと」と[2]にある〈高野本〉の「さらさらさらと」（ともに、宇治橋を渡る部分）、[1]にある〈ヘイケ〉の「ひつぶつと」と[2]にある〈高野本〉の「ひいふつと」（ともに、与一が的を射る部分）のように、本文が対応する部分における語形のわずかな相違に基づくものがある。しかし、漢語については表6の語群を見る限り、本文が対応する部分における語形のわずかな相違によるとは言えない。そして、[1]に比較して[2]では漢語が多く並んでいる。そこで、語種による整理を行い、〈ヘイケ〉〈高野本〉のオノマトベに漢語の占める割合をつかむことにする。

表7 〈ヘイケ〉〈高野本〉のオノマトベの語種

作品名	異なり語数			延べ語数		
	和語 %	漢語 %	計	和語 %	漢語 %	計
〈ヘイケ〉	49(84.5)	9(15.5)	58	158(91.3)	15(8.7)	173
〈高野本〉	52(72.2)	20(27.8)	72	265(88.9)	33(11.1)	298

〈ヘイケ〉も〈高野本〉もオノマトベの異なり語数・延べ語数は漢語より和語の方がはるかに多い。しかし、〈ヘイケ〉に比べて〈高野本〉の方が漢語の割合が高く、その傾向は異なり語数において強く表れている。

〈高野本〉では各語の使用度数は少ないが、漢語のオノマトベをよく用いている。しかし、〈ヘイケ〉では原拠の平家物語に基づき、抜き書き的に書き直すにあたり、漢語の使用を減らしている。これには〈ヘイケ〉の編集目的（宣教師の日本語学習の教材を作る）と編集方法（漢文体の記事を基本的に採らない）が関わりと推定する。

以上、使用率の差が10パーミル未満で〈高野本〉か〈ヘイケ〉がゼロの語を分析した結果をあげる。

- ・ 〈高野本〉では各語の使用度数は少ないが、漢語のオノマトベをよく用いてい



る。しかし、〈ヘイケ〉では原拠の平家物語に基づき、抜き書き的に書き直すにあたり、漢語の使用を減らした。これには〈ヘイケ〉の編集目的（宣教師の日本語学習の教材を作る）と編集方法（漢文体の記事を基本的に採らない）が関わりと推定する。

## 5. 使用率の差が10パーミル以上で〈高野本〉で使用度数がゼロの語

〈ヘイケ〉〈高野本〉で使用率の差が10パーミル以上で、〈高野本〉で使用度数がゼロの語は「そつと」「まちつと」「むさと」「ひたと」「まつと」である。これらは『日本古典対照分類語彙表』（『古典語彙表』と呼ぶ）に見出しが存在しない。次の点で調査する。

- ・『日本国語大辞典』（『日国大』と呼ぶ）での記述

- ・平家物語諸本における対応箇所の有無とオノマトペの異同

平家物語諸本には〈ヘイケ〉の原拠に近いと考えられている斯道文庫本・平松本・小城鍋島文庫本を新たに追加し、伝本の呼称として「斯道本」・「斯」・「平松本」・「平」・「小城本」・「小」を用いる。斯道文庫本・平松本・小城鍋島文庫本は漢字片仮名表記である。振り仮名は漢字の直後の括弧に入れて引用する。〈ヘイケ〉の例の後に、その例文を含む節の原拠に近い伝本を示す。諸本の例の後に語の有無・異文などの注記を施す。

### 5. 1 そつと 〈へ〉 使用度数 6

① 〈へ〉 何とやうになりともお声をそつと出ださせられいと、ささやいて（29、8）覚一本

「小」如何様（ヤウ）ニモ御声ノ出ベウ候ト申ケレバ（47下右7）語なし

「平」如何様ニモ御音ノ出妙候ト私言（ササヤキ）テ（巻二14ウ4）語なし

「斯」イカヤウニモ御音ノ出ヘウ候ト私言（ササヤキ）テ（97、3）語なし

〈高〉「いかさまにも御声のいづべう候」とささやいて、（上82、13）語なし

② 〈へ〉 しんらが池に飛び入つて、目ばかりそつと出て震ひゐたれば、（135、11）

「斯」

「小」新羅（ラ）カ池（イケ）ニ飛入テ目ハカリ僅（ワツカ）ニ指（サシ）出シテ振（フル）イ居タレハ（136下左9）

「平」新羅カ池ニ飛入テ水ノ底ニ入瀕（ウキクサ）ヲ顔（ツラ）ニ采（ト）リ懸テ戦フヲ見居タリケレハ（巻四35ウ8）異文

「斯」新羅カ池ニ飛入テ目ハカリ僅（ハ）ニ指出シテ振イ居タレハ（287、6）

〈高〉に井野の池へ飛ンでいり、うき草かほにとりおほひ、ふるひゐたれば、

(上248、15) 異文

- ③ <へ> その時皆色をそつと直いて、頼もしう思はれてござる。(194、24)「斯」

「小」人々少シ色ヲ直シ憑シクコソ思ハレケレ (232下右1)

「平」人々少シ色直テ憑シクコソ召ケレレ思 (巻七35オ5)

「斯」人々少シ色ヲ直シ憑シクコソ思ハレケレ (471、2)

<高> 人々皆たのもしげにぞ見えられける。(下61、15) 句なし

- ④ <へ> 平家は讃岐の屋島にゐられたれども、そつと歩(ふ)をし直いてあそここ十  
四が国ほど切り従へて (209、1)「平」

「小」平家ハ讃岐ノ屋島ニマシマシケレハ源氏ハ備中国水島ガ磯ニ陣ヲ取ル  
(250下左7) 句なし

「平」平家讃岐ノ八島ニ<sup>乍</sup>有山陽道八ヶ国南海道六ヶ国都合十四ヶ国ヲ討取ケル  
(巻八20ウ1) 句なし

「斯」巻8欠

<高> 平家は讃岐の八島にありながら、山陽道八ヶ国、南海道六ヶ国、都合十四ヶ国  
をぞうちとりける。(下92、1) 句なし

- ⑤ <へ> 景清が出て、水尾谷(みをのや)が甲の鍔を引きちぎつてこそ、平家方にもそ  
つと色を直いてあつた。(338、2)「斯」

「小」巻11欠

「平」上総ノ悪七兵衛景清ト名乗捨テソ帰ケル判官是ヲ見給テ (巻十一15オ6)  
句なし

「斯」上総悪七兵衛景清ト名乗り捨テソ帰ケル判官是ヲ見玉ヒテ (651、7) 句なし

<高> 上総の悪七兵衛景清よ」と名のり捨ててぞかへりける。平家これに心地なほし  
て、(下278、15) 異文

- ⑥ <へ> さうして合戦が始まれば、始めは平家そつと勝ち色にあつたれども、(343、4)  
「斯」

「小」巻11欠

「平」平家は是ヲ見テ御方既勝ストテ (巻十一21ウ4) 異文

「斯」平家は是ヲ見御方既ニ勝(チ)ストテ (660、10) 異文

<高> 平家、みかたかちぬとて、(下289、7) 異文

「そつと」6例のうち、例②・例③で平家物語諸本に対応する語が存在する。例②は  
「小城本」の「わづかに」と「斯道本」の「はづかに」、例③は「小城本」「平松本」「斯  
道本」の「すこし」である。例①は対応する語が存在しない。例④・例⑤・例⑥は対応

する句が存在しなかったり、異文であったりする。

前後の文脈から意味を考えると、例①・例⑥の「そつと」は「すこし」や「わずかに」と言い換えられる。例④の「歩」とは「歩兵（ふひょう）」のことである。例④の「そつと」は「源氏に気づかれないように」と解される。例⑤は景清が鏖引きに勝利する場面で、「そつと色を直す」は「すこし元気を回復する」と解される。例①・例②・例③・例⑤・例⑥は程度副詞（量副詞を含む）、例④は情態副詞として機能している。<sup>(注8)</sup>

「日国大」では「そつと」を2つのランチに分け、(1)に〈エソボ〉、(2)に〈ヘイケ〉の例を載せる。「日国大」の用例は17世紀初めまでのものを引くことにする。

そつ - と

- (1) 少し。ちょっと。わずか。

杜詩統翠抄〔1439頃〕五「麝香も鸚武もそつとは不<sub>レ</sub>近<sub>レ</sub>人者也」

天草本伊曾保物語〔1593〕馬と驢馬との事「ソナタト ワレワ イチモンデ sotto（ソットノ） カウゲヲモッテ ヘダタッタ」

- (2) ひそかに。静かに。こっそりと。また、内々（ないない）に。

史記抄〔1477〕三・周本紀「つびの中へ入た処を、そつととらへたと言様に」

天草本平家物語〔1592〕四・一七「ヘイケガタニモ sotto（ソット） イロヲ ナヲイテ アッタ」

「日国大」で(2)のランチに掲示する〈ヘイケ〉の例は、上記の例⑤に相当する。この例は(1)のランチに入れるべきで、(2)のランチに〈ヘイケ〉から引用するのであれば、例④を利用するのがよい。

『邦訳日葡辞書』（日葡辞書と呼ぶ）には「Sotto 少しばかり」「Sottoxita coto 少しの事」「Sottoxita fito 普通の人、または、あまり値打ちのない人」「Sottozzutcu それぞれに少しずつ」の4語が見られる。どれも「日国大」の(1)のランチに属するものである。

「そつと」は15世紀の話言葉を映す文献に見られる語で、「すこし」や「わずかに」、「ひそかに」や「こっそりと」の意味を表した。〈ヘイケ〉や〈エソボ〉の例、日葡辞書の記述から、1600年前後は「すこし」や「わずかに」の意味で用いることのほうが多かったと推量される。

## 5. 2 まちつと 〈へ〉使用度数5

- ① 〈へ〉右馬。とてもものに平家に対して起こされた謀叛の起りをまちつとお語りあれ。(13、15) 覚一本

② 〈へ〉 右馬. 喜一まちつとお続けあれ. 喜. さらば夜が更けまらせうずれども,

(42、1) 覚一本

③ 〈へ〉 右馬. この茶を飲むで息を継いで, まちつとお語りあれ. (284、20)「斯」

④ 〈へ〉 右馬. まちつとお語りあれ. 喜. 三位の中将は (311、22)「斯」

⑤ 〈へ〉 右馬. さても哀れなことであつたなう: その女院のおことをもまちつとお語りあれ. (394、19)「斯」

全例、右馬の允の会話に現れ、喜一検校に話の続きをうながす部分で用いられている。そのため、平家物語諸本に対応する部分が存在しない。

「日国大」では「まちつと」に〈ヘイケ〉の例③を載せる。

ま - ちと

「まちと」の変化した語。

応永本論語抄〔1420〕子罕第九「まちとせよとはすすめまじき也」

天草本平家物語〔1592〕四・一〇「コノ チャラ ノウデ イキラ ツイデ、  
machitto (マチット) ヲカタリアレ」

「日国大」の「まちと」の記述は次のようである。

ま - ちと (副詞「ま」と「ちと」を重ねたもの)

いますこし。もうすこし。まちと。

両足院本山谷抄〔1500頃〕一二「貴方はまちと力をつけたらば天下に名が大に  
きこえうずぞ」

本福寺跡書〔1560頃〕大宮参詣に道幸〈略〉夢相之事「まちとよみたまへ。き  
きたい」

日葡辞書には「Machitto 副詞. さらにもう少し。」がある。

「古典語彙表」によると、「ちと」は宇治拾遺物語と徒然草の2作品に、「ちつと」は平家物語に存する。「ちと」とその促音形は鎌倉時代以降の文献に見られる。

「まちつと」は15世紀の文献に見られる語で、「もうすこし」の意味を表し、程度副詞として機能している。〈ヘイケ〉では命令表現が下接し、相手に動作をうながす用法で用いられている。

### 5. 3 むさと 〈へ〉 使用度数3

① 〈へ〉 たとひ仰せなりとも, 成親卿をむさと失ひ奉るな: (32、23) 覚一本

「小」仰ナレバトテ汝等アノ大納言左右ナフ切事不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有 (49下左5)

「平」大納言左右無<sub>フ</sub>切事不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有 (巻二17ウ2)

「斯」アノ大納言サウナフキルコト有ヘカラス (101、10)

〈高〉「仰なればとて、大納言左右なう失ふ事あるべからず。(上86、5)

- ② 〈へ〉清. はこれを聞いて、むさとしたことを言ふ宗盛かなと言うて、…さらば早う  
出家をさせまらして、(139、5)「斯」

「小」入道物モ覚(シラ)ヌ宗盛カナト…サラハトクトク出家セサセ奉テ  
(139上右7) 異文

「平」入道左有ハトテ宥(ナタメ)進給ケリ出家セサセ奉セテ(巻四38オ7)  
該当部分なし

「斯」入道物モ覚ヌ宗盛カナト…サラハトクトク出家(シユツケ)セサセ奉テ  
(292、2) 異文

〈高〉入道、「さらばとうとう出家をせさせ奉れ」と(上252、5) 該当部分なし

- ③ 〈へ〉まことに木曽が主上、法皇の分けをも知らいで、むさとしたことを言うたこと  
はをかしいことぢや。(224、11)「平」

「小」法皇ヲ見奉テ院ト申ハ法師ト心エ内ノ幼(ヲサナク)テ御元服ナカリケルヲ見  
奉セテハ童ト心エタリケルゾ浅猿キ(260下右5) 異文

「平」院ノ御出家有ルヲハ法皇ト申主上ノ未御元服モ無程ハ御童形ニテ渡ラセ給フヲ  
不<sub>レ</sub>知サリケルコソ浅益ケレ(巻八35オ1) 異文

「斯」巻8欠

〈高〉院の御出家あれば法皇と申。主上のいまだ御元服もなき程は、御童形にてわた  
らせ給ふを知らざりけるこそうたてけれ。(下111、1) 異文

「むさと」3例のうち、例①は平家物語諸本で「左右なう」が対応する。例②・例③  
は異文であるか該当部分が存在しない。

「日国大」では「むさと」を5つのブランチに分ける。

むさ - と(「むざと」とも)

- (1) とるべき態度・守るべき節度をわきまえず、無分別・不注意であるさまを表わ  
す語。軽はずみに。思慮もなく。うっかりと。

弓張記〔1450～1500頃か〕「矢ごろ矢たけと云ふ事。むさと云まじき事也」

玉塵抄〔1563〕六「唐は法がきぶいほどにをこのきるものはくものなど一に  
むさととはせぬぞ」

虎明本狂言・蟹山伏〔室町末～近世初〕「やいやいむさとそばへなよりおつそ」

日葡辞書〔1603～04〕「Musato (ムサト) シタ コトラ ユウ」

- (2) 正当な理由もなく、または、いいかげんに事を行なうさまを表わす語。みだり

に。むやみに。やたらに。

玉塵抄〔1563〕二八「いわれなうてはむさと字をそえまいぞ」

島津家文書（文祿三年〔1594〕七月）・島津氏分国検地奉行起請文前書案（大日本古文書二・一一〇一）「其村々ににくきもの之とて、御検地などむさとあしく仕まじく候」

- (3) あまりれっきとしたものでないさま、ちゃんとしていないさまを表わす語。

咄本・昨日は今日の物語〔1614～24頃〕下「我らがやうな尊き知識などが、何とて、むさとしたる所へ寄るものか」

- (4) とりとめなく、無為に過ごすさまを表わす語。

古文真宝彦龍抄〔1490頃〕「物をきかじ見じと云心、然どもむさとしては叶まい」

日葡辞書〔1603～04〕「Musato（ムサト） シテ イル」

- (5) あっさりとむざうさに事を行なうさまを表わす語。

〈ヘイケ〉の3例はすべて「日国大」の(1)に属すると考えられる。

「むさと」は15世紀の文献に見られる語で、〈ヘイケ〉成立期には意味の広がりがある。日葡辞書の用例にも意味の広がりが見られる。しかし、〈ヘイケ〉では意味の広がりがなく、あれこれとためらうことなく、無造作であるようすや、筋の通らないようす、道理をわきまえないようすを表した。

#### 5. 4 ひたと 〈へ〉使用度数3

- ① 〈へ〉道で関白殿の御参内あるに、鼻突きにひたと参り合はれたところで、(14、23) 覚一本

「小」大炊ノ御門堀川ニテ殿下ノ御出ニ鼻突（ツキ）ニ参合テ（23下左3）語なし

「平」大炊御門堀川ニテ殿下ノ御出ニ鼻突（ツキ）ニ参合（巻一28オ5）語なし

「斯」大炊御門堀川ニテ殿下ノ御（キヨ）出ニ鼻突（ハナツキニ）参り合フ（45、2）語なし

〈高〉大炊御門猪熊にて、殿下の御出御に鼻づきに参りあふ。（上39、15）語なし

- ② 〈へ〉宗康は足がしたたか腫れて、歩くこともならず、ただ地にひたと伏してゐたに、（215、19）「平」

「小」小太郎ハ大ニ足（アシ）腫（ハレ）テ臥居タリ（253下左6）語なし

「平」小太郎ハ足大ニ腫（ハレ）テ伏居タリ（巻八25ウ1）語なし

「斯」巻8欠

〈高〉小太郎は、足かンばかりはれてふせり。(下98、10) 語なし

- ③ 〈へ〉約束をしたことなれば、(源行家を) 五番目でひたと受け止めて、敵を中に取り籠めて、(217、18)「平」

「小」(254下左) 該当部分なし

「平」一陣ヨリ後陣及兼テ約束シタリケレハ敵ヲ中ニ取籠テ (巻八26ウ8) 句なし

「斯」巻8 欠

〈高〉一陣より五陣まで、兼て約束したりければ、敵を中にとりこめて、(下100、14) 句なし

「ひたと」3例のうち、例①・例②は平家物語諸本に対応する語が存在しない。例③は対応する句や該当部分が存在しない。例①の「ひたと」は関白殿の参内の列という対象に密接する意味を、例②は地面という対象にじかに接する意味を、例③は源行家という対象にたしかに直面する意味を表している。

「日国大」では「ひたと」を3つのブランチに分ける。

ひた - と 【直一・頓一】

- (1) 隔てるものがなく、直接に接するさまを表わす語。じかに。直接。ぴたりと。  
今昔物語集〔1120頃か〕二七・三五「ひたと抱付(いだきつき)て」  
サントスの御作業〔1591〕二・サントエウゼニヤ「ゼンニン タッテ カエラン  
ト シタマエバ、fitato (ヒタト) トリ ツキ」
- (2) もっぱらそのことに集中するさま、その状態であるさまを表わす語。ひたすら。  
いちずに。はなはだしく。  
史記抄〔1477〕一二・刺客「自帰依仏と云もひたと仏をたのむ心ぞ」  
石山本願寺日記・宇野主水日記・天正一四年〔1586〕四月「廿日比よりひたと  
雨降」
- (3) 突然その状態になるさまを表わす語。にわかに。はっと。

「ひたと」は今昔物語集に例が存在することから12世紀には用いられていた語である。  
〈ヘイケ〉の「ひたと」は対象に密接する、じかに接する、たしかに直面するという意味を表し、「日国大」の(1)のブランチにあたる。(1)の用例にもあるように、「ひたと」がかかる動詞は「つく」が基本的であろうが、〈ヘイケ〉では「参り合ふ」「伏す」「受け止む」というように変化に富む。

ところで、〈ヘイケ〉には「ひたと」の促音化した「ひつたと」が1例存する。

- ④ 〈へ〉およそ八日、九日路にはひつたと続いて、野も、山も、海も、川も武者ばかりでござる：(150、15)「斯」

「小」凡八日九日ノ路（ヂ）ニハ礪（ハタ）トツヰテ野モ山モ武者テ候  
（166下右9）

「平」凡八日九日ノ路ニハ波多ト列テ野モ山モ海モ河モ武者デ候（巻五31ウ8）

「斯」八日九日ノ路ニハハタトツヰテ野モ山モ海モ河モ武者テ候（350、11）

〈高〉凡八日九日の道に、はたとつづいて、野も山も、海も河も武者で候。  
（上307、2）

例④の「ひつたと」には平家物語諸本で「はたと」が対応している。この「ひつたと」は武者の列にすきまがない様子を表している。「日国大」では〈ヘイケ〉の例④を載せる。

ひった 【直】（「と」を伴って用いることもある）「ひたと（直一）」に同じ。

申楽談儀〔1430〕拍子の事「是よりかかりを体にして、ひったと音曲にかかるべし」

天草本平家物語〔1592〕二・一〇「ヲヨソ ヤウカ、ココノカザ ニワfittato（ヒッタト） ツヰテ、ノ モ、ヤマ モ、ウミモ、カワ モ ムシャ バカリ デゴザル」

この記述では、申楽談儀と〈ヘイケ〉の引用例が「ひたと」の3つあるブランチのどれに属するか分明でない。申楽談儀の例では「ひつたと」が謡い方のきびきびとしたさまを表している。申楽談儀の例も〈ヘイケ〉の例もテンポや列のすきまのなさを表し、「ひたと」の(1)に帰属させてよい。

## 5. 5 まつと 〈へ〉使用度数2

① 〈へ〉右馬. なう喜一. その先をもまつとお語りあれ. (149、7)「斯」

② 〈へ〉右馬. おくたびれあらずは、まつとお語りあれ. (275、23)「斯」

「まちつと」と同様に、全例、右馬の允の会話に現れ、喜一・検校に話の続きをうながす部分で用いられている。そのため、平家物語諸本に対応する部分が存在しない。

「日国大」では〈ヘイケ〉の例①を載せる。

まっと

さらにもう少し続けて。さらにもう少し多く。もうちょっと。まちつと。まちと。もっと。

史記抄〔1477〕九・孝武本紀「文成をまっといけて置て猶を其方を尽させてみうす」

天草本平家物語〔1592〕二・一〇「ナウ キイチ、ソノ サキ ヲモ matto（マット） ヲカタリアレ」



日葡辞書には「Matto 副詞. さらにもう少し。」がある。

この語の構成について安原貞室著『かた言』(1650年刊行)に「今卒度(いまそつと)といふべきを、まつとと云こと如何。但(ただし)略語(りやくご)なれば、くるしかるまじき歟。そつとといふべきを、もつとと云はくるしからぬ歟。」とある。

「まつと」は15世紀の文献に見られる語で、「さらにもうすこし」と付け加える意味を表した。17世紀半ばには「いまそつと」の音変化により成立したと考えられていた。

## 5. 6 まとめ

使用率の差が10パーミルを超えるオノマトベの中で、〈高野本〉で使用度数がゼロの「そつと」「まちつと」「むさと」「ひたと」「まつと」を分析した。その結果は次の通りである。

- ・ 「そつと」は15世紀の口語を映す文献に見られる語で、「すこし」や「わずかに」、「ひそかに」や「こっそりと」の意味を表した。〈ヘイケ〉や〈エソボ〉の例、日葡辞書の記述から、1600年前後は「すこし」や「わずかに」の意味で用いることのほうが多かったと推量される。
- ・ 「まちつと」は15世紀の文献に見られる語で、「もうすこし」の意味を表し、程度副詞として機能している。〈ヘイケ〉では命令表現が下接し、相手に動作をうながす用法で用いられている。
- ・ 「むさと」は15世紀の文献に見られる語で、〈ヘイケ〉成立期には意味の広がりがある。日葡辞書の用例にも意味の広がりが見られる。しかし、〈ヘイケ〉では意味の広がりがなく、あれこれとためらうことなく、無造作であるようすや、筋の通らないようす、道理をわきまえないようすを表した。
- ・ 「ひたと」は今昔物語集に例が存在することから12世紀には用いられていた語である。〈ヘイケ〉の「ひたと」は対象に密接する、じかに接する、たしかに直面するという意味を表す。「ひたと」がかかる動詞は「つく」が基本的であろうが、〈ヘイケ〉では「参り合ふ」「伏す」「受け止む」というように変化に富む。
- ・ 「まつと」は15世紀の文献に見られる語で、「さらにもうすこし」と付け加える意味を表した。17世紀半ばには「いまそつと」の音変化により成立したと考えられていた。

これらは「古典語彙表」に見出しが存在せず、15世紀の文献に見られる語である。〈ヘイケ〉は、音象徴により成立したオノマトベ語彙が話し言葉で副詞として機能する様子を反映している。オノマトベ語彙が程度副詞として機能することは比較的少ないと

されるが、<sup>(注9)</sup>〈ヘイケ〉では「そつと」「まちつと」「まつと」が程度副詞として機能している。

## 6. おわりに

〈ヘイケ〉のオノマトペを語彙量の視点で〈高野本〉〈エソボ〉と比較し、オノマトペの使用部分を平家物語諸本の該当部分と対応させて分析した。その結果、次のことが判明した。

- (a) 異なり語数・延べ語数の観点でオノマトペの語彙を分析した。〈ヘイケ〉は〈高野本〉〈エソボ〉と比較してオノマトペの語彙を多用している。
- (b) 〈ヘイケ〉では使用率の高位に、すばやい動作、急な変化、勢いのあるさま、力のこもるさまを表すオノマトペが多く並ぶ。〈高野本〉よりも泣くさまを表すオノマトペの使用率が低い。
- (c) 〈ヘイケ〉〈高野本〉の間には同じオノマトペでも使用率の高位の語に使用率の大きな差が見られる。
- (d) 〈ヘイケ〉〈高野本〉の使用率の差が10パーミル未満でどちらかがゼロの語を分析した。〈高野本〉では漢語のオノマトペをよく用いているが、〈ヘイケ〉では漢語の使用が少ない。これには〈ヘイケ〉の編集目的（宣教師の日本語学習の教材を作る）と編集方法（漢文体の記事を基本的に採らない）が関わりと推定する。
- (e) 〈ヘイケ〉〈高野本〉の使用率の差が10パーミルを超え、〈高野本〉でゼロの語は「そつと」「まちつと」「むさと」「ひたと」「まつと」である。これらは「古典語彙表」に見出しが存在せず、15世紀の文献に見られる語である。〈ヘイケ〉は、音象徴により成立したオノマトペ語彙が話し言葉で副詞として機能する様子を反映している。オノマトペ語彙が程度副詞として機能することは比較的少ないとされるが、〈ヘイケ〉では「そつと」「まちつと」「まつと」が程度副詞として機能している。

### 〈注 記〉

注1 たとえば、『日本語学』2015年9月号（明治書院発行）は「オノマトペ研究の最前線」の特集を組んでいる。2013年6月11日(火)放送の「クローズアップ現代+」（“ぱみゅぱみゅ”“じぇじぇじぇ”～「オノマトペ」大増殖の謎～）では、脳科学の面からオノマトペは五感を総動員しなければ処理できないほどの膨大な情報量を持っていることが指摘され、オノマトペがスポーツの指導や医療現場における

症状把握に活用されていることなどが報告された。

- 注 2 先行研究に中里理子（2011、2012）、中川祐治（2001）がある。前者は平家物語のオノマトペを和語系・漢語系に分類し、語数と用法を調査したもの。後者は原拠になく添加された副詞の視点で、一部のオノマトペを扱ったもの。天草版『平家物語』のオノマトペの研究は不十分である。
- 注 3 天草版『平家物語』の原拠本研究史については、近藤政美（2008）参照。
- 注 4 斯道文庫本は松本隆信氏の『百二十句本平家物語 別冊』の解題によると、百二十句本としては斯道文庫本のような漢字片仮名交じり本が古態を有するが、屋代本・平松本ときわめて近い関係において成立したと考えられる。平松本は『平松家本平家物語』における池田敬子氏の解説によると、屋代本と覚一本との中間形態で、書承の混態本である。小城鍋島文庫本は『小城鍋島文庫本平家物語』における島津忠夫氏の解題によると、斯道文庫本・鎌倉本・覚一本系の一本などを適宜切りつないでできた編集本である。
- 注 5 本稿では擬音語・擬態語の総称としてオノマトペという語を使用する。飛田良文・浅田秀子（2002）の v～x iv 頁「擬音語・擬態語とは何か」の記述。
- 注 6 濱千代いづみ（2016）の数値に基づく。『日本古典対照分類語彙表』も〈高野本〉の語彙を計量しているが、単位の取り方に少し違いがあり、この表の数値とは一致しない。
- 注 7 〈高野本〉の漢語「さくさくたり（索々）」は「松吹く風索（さく）々たり」（新大系、下218頁4行）に見られる。脚注に「底本、振り仮名「サツ」。正節本により改める。」とある。「さつさつたり」と読むのであれば、〈ヘイケ〉の対応部分の「松吹く風もさつさつとし」（300頁13行）と同語に認定できる。
- 注 8 中川祐治（2001）では例①を情態副詞と認定しているが、聞こえるように声をあげねばならない場面であるので、「こっそりと」の意味では文脈上不自然である。
- 注 9 岡田薫（2016）は現代語について「擬態語が程度副詞として機能することは比較的少ない」とし、「めきめき」「どンドン」等を程度副詞としてあげる。

#### 〈調査文献〉

- 大塚光信・来田隆（1999）『エソポのハプラス本文と総索引』 清文堂出版
- 梶原正昭・山下宏明 校注（1991・1993）新日本古典文学大系『平家物語』上・下  
岩波書店
- 京都大学文学部国語学国文学研究室 編、池田敬子 解説（1988）『平松家本平家物語』

清文堂出版

慶応義塾大学付属研究所 斯道文庫 編、松本隆信 解題校訂（1970）『百二十句本平家物語』 汲古書院

近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ（1999）『天草版平家物語語彙用例総索引』 勉誠出版

近藤政美・武山隆昭・近藤三佐子（1996）『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（自立語編） 勉誠社

島津忠夫・麻生朝道 解題（1982）『小城鍋島文庫本平家物語』 汲古書院

#### 〈文 献〉

岡田薫（2016）「第3章 擬声語・擬音語・擬態語」『品詞別学校文法講座』第4巻 明治書院

近藤政美（2008）『天草版『平家物語』の原拠本、および語彙・語法の研究』 和泉書院  
小学館国語辞典編集部（2000～2002）『日本国語大辞典 第二版』 小学館

土井忠生・森田武・長南実 編訳（1980）『邦訳日葡辞書』 岩波書店

中川祐治（2001）「『天草版平家物語』における副詞の位置一添加される副詞を中心に一」  
『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』第50号

中里理子（2011）「延慶本『平家物語』に見られるオノマトベ」『上越教育大学研究紀要』第30巻

中里理子（2012）「平家物語の擬音語・擬態語—延慶本，覚一本，百二十句本の比較から—」『上越教育大学研究紀要』第31巻

濱千代いづみ（2013）「南吉童話に見られるオノマトベの語彙と用法」『解釈』11・12月号 第59巻第11・12号 解釈学会

濱千代いづみ（2016）『中世近世日本語の語彙と語法：キリシタン資料を中心として』 和泉書院

飛田良文・浅田秀子（2002）『現代擬音語擬態語用法辞典』 東京堂出版

宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉（2014）『日本古典対照分類語彙表』 笠間書院  
吉田澄夫 解説（1972）「安原貞室著『かた言』」影印『近代語研究』第三集 武蔵野書院